

したのです。その時清浦伯は「考えておく」といわれたのです。それでこれはご承諾になつたものと思い、非常に喜び、松本樓を出てすぐ近くの郵便局から兄に電話をかけ、清浦伯にお願いしたことを知らせたのでした。

清浦伯のおかげで校舎ができあがつたのです。ラス張りといつてコンクリートの洋館まがいの建物で、二階には千名も入れる大きな講堂もあり、私立学校でこんな立派な建物を持つてるのは非常に少ないといわれたほどでした。惜しいかな、この建物は昭和九年、関西の大台風（室戸台風）のため、裏手の校舎が倒れて漏電で火が出て表の本館の建物まで延焼して丸焼けになり、ただ入口の玄関だけが残つたのでした。

清浦伯のおかげで建物はできたが生徒は集まらず、拝借したお金をお返しすることができず、利子さえも満足に払えないのです。私は自分で働いて得たわずかな収入のうちから、利子の内入れとして毎月少しずつお届けしていたのです。銀行の利子にも足らないわずかなお金でしたが、きちんと毎月お送りしていました。清浦伯からはご自分でお書きになるか、または清浦伯と同じような書き方をする秘書がいて、その秘書からかどちらかから必ず為替は受け取つたというご通知をいただいたものでした。こちらからお送りするお金は「九牛の一毛に過ぎないが、その精神を嘉とする」というもつたないお手紙をいただいた